中京学院大学中京短期大学部研究紀要　第47巻第1号（2017年3月）

岐阜県Ａ市とＢ市における幼小連携に関する意識調査Ⅱ
－ 保育者の意識と小学校教員の意識 －

Attitude Survey II about Cooperation of Preschool Education and Elementary School Education in Gifu A City and the B City
－ Consciousness of the Preschool Teacher and Consciousness of the Elementary School Teacher －

栗　岡　洋　美*

Hiromi KURIOKA

要　約

幼小連携について、連携の本来の意図を見直し、必要な連携のあり方を考えていくための実態把握を目的として、保育者の意識調査を実施した。そして、前稿で示した小学校教員の結果と比較した。その結果、双方の共通点と相違点がいくつか具体的に示され、連携についての課題のみならず、保育・教育の課題が見えてきた。特に保育者は、様々な力について就学前に身につけておく必要性を小学校教員よりも強く感じている傾向が見られ、“保育者にのしかかるプレッシャー”が浮き彫りになった。その他にも、「双方の意識改革」や「小学校教員が保育を体験すること」や「家庭との連携」の重要性が示され、今後の連携の方向性を見出すことができた。

Abstract

About the cooperation with a preschool education and of the elementary school education, I reviewed an original intention of the cooperation and, for the purpose of actual situation grasp to think about the way of necessary cooperation, carried out the attitude survey of the preschool teacher. And I compared it with the result of the elementary school teacher. As a result, some both common points and differences were shown concretely, and a problem of not only the problem about the cooperation but also childcare, the education was seen. Particularly, the tendency that more strongly than a elementary school teacher felt the need that I acquired before entrance to school about various power was seen, and, as for the preschool teacher, "the pressure to bend over a preschool teacher" was highlighted. In addition, importance of "both consciousness reform" and "a primary school teacher experiencing childcare" and "the cooperation with the home" was shown and was able to find directionality of the future cooperation.

キーワード：
幼小連携、保育者、小学校教員、プレッシャー
Key words：
cooperation of a preschool education and the elementary school education, preschool teacher, elementary school teacher, pressure

Ⅰ．緒言（問題・目的）

本稿では、幼小連携の「幼」を幼稚園のみならず保育所や認定こども園なども含めた「幼児教育」と広く捉えて「幼小連携」と考える。また、幼稚園教諭と保育士を合わせて「保育者」と示す。

幼小連携が全国的に取り組まれ15年近くが経ったが、連携が進んでいる実感をもてない保育者や小学校教員が少なくない現状については前稿で述べたとおりである。

前稿においては、幼小連携に関する小学校教員

*本学専任講師

の意識調査をおこなった。本稿では、前調査と同じ内容で保育者を対象に実施し、現状と課題を明らかにする。また、小学校教員の調査結果と比較分析をすることによって、双方の差異を示す。

保育者と小学校教員の間における見解の差異が連携の壁となっているということは、以前から問題視されていたことである。例えば、指導要録に着目して保育者からの「伝えたい情報」と小学校教員からの「知りたい情報」を比較した河口ほか[1)]の研究や、子どもの自己抑制と自己主張・実現に関する双方の捉えを示した進野ほか[2)]の研究、Beliefに関する68項目の回答結果より幼稚園教諭と小学校教員の捉えを分析した佐藤ほか[3)]の研究からも双方の差異が示唆されている。

しかしながら、その差異の具体的な内容や差異を埋める手立ての検討はまだ少ない。そこで、本研究は、現場からの問題意識を具体的に明らかにし、今後の連携のあり方の方向性を見出すことを目的としておこなう。

Ⅱ．方法

１．研究方法

質問紙調査を実施した。その結果から、保育者の幼小連携に対する意識を分析した。さらに、前稿の小学校教員におけるデータを用いて教員と保育者の比較分析をした。

２．調査対象・調査期間

調査対象者は、岐阜県Ａ市とＢ市内の保育園・幼稚園の全保育者である。フェイスシートで、回答者の性別、年齢、経験年数、小学校での勤務経験、年長クラス担任経験についてたずねたところ、表１の結果となった。（小学校教員の属性についても合わせて示した。）

調査実施期間は、教員と同じく平成27年１～３月である。

Ａ市には幼稚園と保育園が同じ建物内に存在する園が多数あり、その他幼稚園と保育園が少数ある。Ｂ市には幼稚園と保育園があり、保育園の数の方が若干多いという地域特性がある。

表１　調査対象者の属性

属性	項目	保育者				教員			
		Ａ市 N＝80		Ｂ市 N＝128		Ａ市 N＝71		Ｂ市 N＝90	
		N	%	N	%	N	%	N	%
性別	男	5	6.2	3	2.3	20	28.1	26	28.8
	女	75	93.7	125	97.6	51	71.8	64	71.1
年齢	20代	25	31.2	37	28.9	13	18.3	19	21.1
	30代	20	25	31	24.2	5	7	12	13.3
	40代	19	23.7	25	19.5	32	45	21	23.3
	50以上	16	20	35	27.3	21	29.5	38	42.2
経験年数	1～10年	39	48.7	71	55.4	20	28.1	32	35.5
	11～20	25	31.2	39	30.4	15	21.1	14	15.5
	21～30	9	11.2	9	7	23	32.3	27	30
	31以上	7	8.7	9	7	13	18.3	17	18.8
幼：小学校経験 小：園経験	有り	2	2.5	2	1.5	3	4.2	4	4.4
	無し	78	97.5	126	98.4	68	95.7	86	95.5
幼：年長担任経験 小：1年担任経験 （過去3年間）	有り	32	40	46	35.9	21	29.5	35	38.8
	無し	48	60	82	64	50	70.4	55	61.1

３．手続き

筆者が直接各園に配布、回収をした。無記名、封書による回収とした。

４．調査用紙の構成

フェイスシートと「就学前の子ども達に関するアンケート」で構成されている。意識調査の質問内容は、大きく分けて下記の４点であり、教員対象の質問内容とほぼ同じである。

①子どもの気になる姿と就学前に身につけておく必要がある姿について

②国語と算数にかかわる内容の就学前の取り組みについて

③小学校の様子を見ることについて

④連携のあり方について

その他、自由記述式で連携に対する意見を調査した。

「子どもの気になる姿」についての質問項目は、木山ほか[4),5)]の調査内容を参考にした。

５．調査に対する配慮

各市教育委員会、市の管轄部署（子育て支援課など）、園長会において研究の趣旨を説明し、管理職の同意を得たうえで配布をした。説明の中では、今後の連携のあり方を見出していくための資

料となるため、結果をフィードバックすることを伝えた。

アンケート用紙には、研究の趣旨や倫理的配慮事項を明記し、「同意する」「同意しない」の選択項目を設けて、辞退できるように配慮した。

Ⅲ．結果

Ａ市保育者の有効回答数は80部（回収率44％）、Ｂ市は128部（回収率50％）であった。

１．子どもの気になる姿と就学前に身につけておく必要がある姿について

図１は、保育者による園の幼児に対する感じ方と教員による小学校の児童に対する感じ方を示したものである。Ａ市とＢ市を合わせた保育者208名と教員161名によるデータで全体の傾向を割合で示している。「クラスにいると感じる程度」の保育者の回答は、過去３年間に年長クラス担任（副担任や補助も含む）経験のある保育者78名のみにおける年長児の姿に対しての回答となっている。

「クラスにいると感じる程度」において、60％以上の回答率を得られた項目は、「基礎体力が乏しい」で「少数いる」と回答した教員が60.6％、「先生や友達に親しみをもてない」で「ほとんどいない」と回答した保育者が70.5％教員が60.9％、「絵本に親しめない」で「ほとんどいない」と回答した保育者が68.8％教員が69.2％であった。

「基礎体力が乏しい」の「少数いる」では、保育者も59.2％と６割近く回答しており、双方が“目立つ程度ではないが少数いる”と同じように捉えている傾向が示された。「親しみ」と「絵本」の項目においては、双方が「ほとんどいない」という捉えで共通し、子ども達は“人にも絵本にも親しむことができている”と感じている傾向が示された。

また、「クラスにいると感じる程度」において「大変目立つ」と「やや目立つ」の回答を合わせて割合を出し、気になる姿として表したものが図２である。保育者と教員の感じ方の違いをカイ２乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められたのは次の４項目である。これらは全て保育者の方が気になっている程度が上回っている。「時間を意識して行動できない（x^2=3.9378,p<.05）」「食事マナーが悪い（x^2=19.0383,p<.01）」「ものを大切に扱わない（x^2=5.1947,p<.05）」「基礎体力が乏しい（x^2=4.9547,p<.05）」

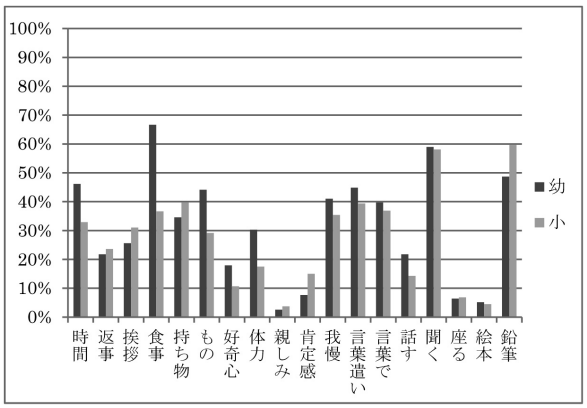

図２　「子どもの気になる姿」

一方で、「先生の話を最後まで注意深く聞けない」の項目では、59.0％の保育者と58.1％の教員が気になる姿と感じており、双方共通して６割近くの回答が得られた。

さらに、「クラスにいると感じる程度」を得点化したものを「子どもの気になる姿得点」とした。（４件法による回答結果を１から４の数値で重みづけをして、18項目の平均点を表したものが図３である。）保育者において最も得点が高かった項目は、「食事マナーが悪い」の2.9点であった。教員においては、「鉛筆を正しく持てない」の2.8点であった。

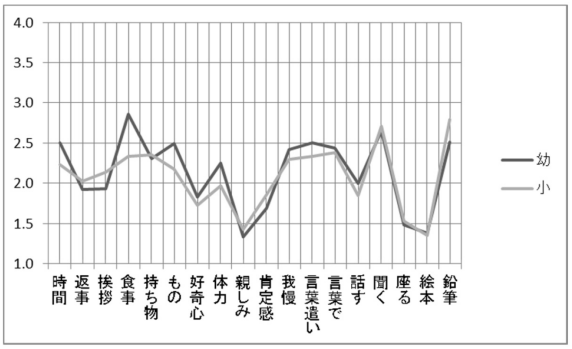

図３　「子どもの気になる姿」得点

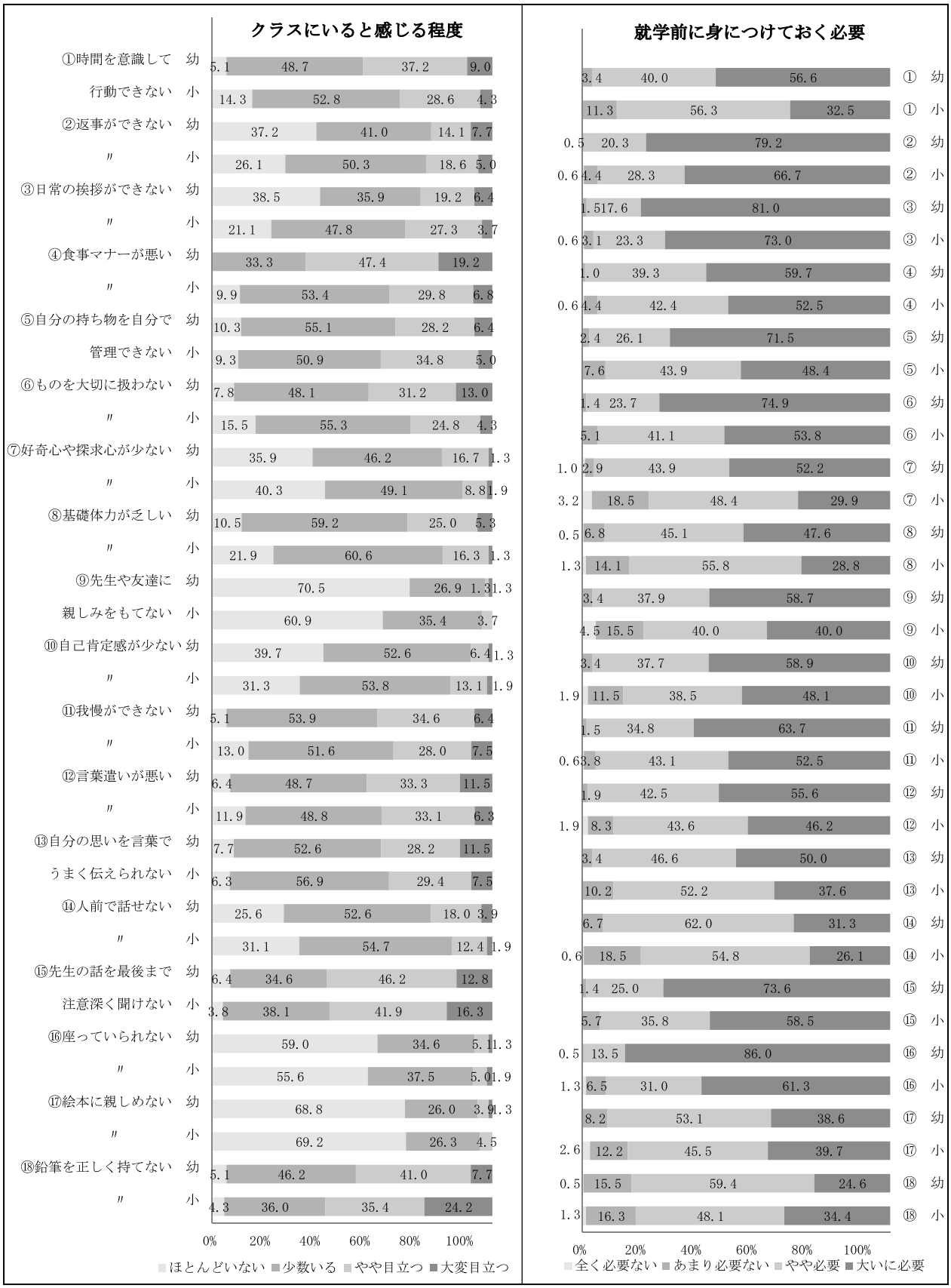

図１　「クラスにいると感じる程度」と「就学前に身につけておく必要」に関する意識の比較
（Ａ市とＢ市の合算、上段：幼　N=208，下段：小　N=161）

そして、双方の「子どもの気になる姿得点」が正規分布であると仮定して得点の平均点の差について、Welch法によるt検定をおこなった（有意水準５％、両側検定）ところ、次の５項目において有意差が見られた。

「時間：t(237)＝2.39,p＝.009」

「食事マナー：t(237)＝5.00,p＝5.51*10^(-7)」

「もの：t(237)＝2.58,p＝.005」

「基礎体力：t(237)＝2.64,p＝.004」

「鉛筆：t(237)＝2.41,p＝.008」

この５項目のうち、「鉛筆」だけは教員の方が気になる意識が上回ったが、その他４項目は、保育者の方が上回った。

一方で、双方の捉えが一致している項目も示された。「先生や友達に親しみをもてない」は保育者が1.3点教員が1.4点、「座っていられない」は保育者も教員も1.5点、「絵本に親しめない」は保育者も教員も1.4点で、この３項目においては他の項目よりも得点が低く、「ほとんどいない」～「少数いる」にあてはまる。また、「先生の話を最後まで注意深く聞けない」は保育者も教員も2.7点で「少数いる」～「やや目立つ」にあてはまり、高得点の結果で一致した。

次に、図１より「就学前に身につけておく必要」において60％以上の回答率を得られた項目は以下のとおりである。次の７項目は、全て「大いに必要」の回答であった。「返事」は保育者が79.2％教員が66.7％、「挨拶」は保育者が81.0％教員が73.0％、「持ち物管理」は保育者が71.5％、「ものを大切に」は保育者が74.9％、「我慢」は保育者が63.7％、「話を注意深く聞く」は保育者が73.6％、「座る」は保育者が86.0％教員が61.3％であった。

そして、「人前で話す」の「やや必要」の回答では、保育者が62.0％であった。

教員が60％以上回答した項目は、保育者でも60％以上の回答が得られている。そして、双方が60％以上回答した３項目（「返事」「挨拶」「座る」）においては、保育者の割合の方が高くなっている。

また、「子どもの気になる姿得点」と同様に「就学前に身につけておく必要得点」を出し、表したものが図４である。双方の得点が正規分布であると仮定して得点の平均点の差についてWelch法によるｔ検定をおこなった（有意水準５％、両側検定）ところ、次の15項目において有意差が認められた。

「時間：t(367)＝4.88,p＝8.05*10^(-7)」

「返事：t(367)＝2.93,p＝.002」

「挨拶：t(367)＝1.71,p＝.04」

「持ち物：t(367)＝4.42,p＝6.44*10^(-6)」

「もの：t(367)＝4.1,p＝2.5*10^(-5)」

「好奇心：t(367)＝5.43,p＝5.21*10^(-8)」

「基礎体力：t(367)＝3.73,p＝.0001」

「親しみ：t(367)＝4.9,p＝7.37*10^(-7)」

「肯定感：t(367)＝2.96,p＝.002」

「我慢：t(367)＝2.2,p＝.014」

「言葉遣い：t(367)＝2.64,p＝.004」

「言葉で伝える：t(367)＝2.78,p＝.003」

「話す：t(367)＝2.45,p＝.007」

「聞く：t(367)＝3.09,p＝.001」

「座る：t(367)＝5.33,p＝8.8*10^(-8)」

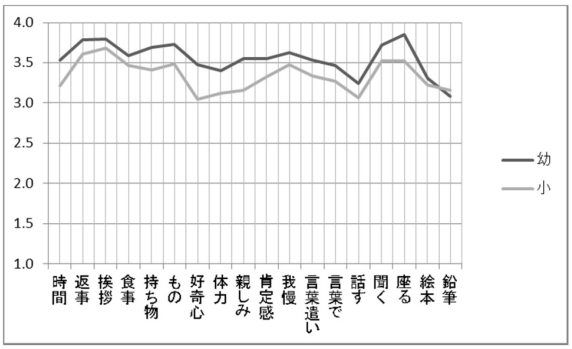

図４　「就学前に身につけておく必要」得点

この中で特に興味深い内容は、「座っていられる」力に対しての必要性において双方の差が明らかになったことである。さらに、「話を注意深く聞く」と「座る」の関連においても注目すると、教員はどちらも平均3.5点で同等に重視しているのに対し、保育者は「話を注意深く聞く(3.7点)」よりも「座る(3.9点)」ことの方を重視していることが分かった。それは、図１で「大いに必要」と

回答した割合からもいえる。「鉛筆を正しく持つこと」以外は、保育者の方が教員よりも就学前に身につけておく必要性を高く意識している傾向が示された。

自由記述の中では入学前に望むこととして、教員から次のような意見が挙げられた。

・はさみやのりを使う経験を積んできてほしい
・困っていることが自分で言えるとよい
・親にたくさん甘えておくことが大切である
・小学校に入ってから生活リズムを立て直すのはかなり難しいので、幼児期から保護者に繰り返し呼びかけて欲しい
・規則正しい生活を送ることが全ての基盤となると思うが、今、そのあたり前のことが家庭でおろそかになっている

保育者からも、自由記述の中で同じく家庭に関する次のような意見が挙げられた。

・特に基本的生活習慣については家庭と一緒にすすめていかなければならないが、園におまかせの家庭もある
・小学校の先生から保護者に、幼児期に家庭で大切にするとよいことについて話をして欲しい

２．国語と算数にかかわる内容の就学前の取り組みについて

国語と算数にかかわる内容について、「入学前の子どもの姿としてどのような姿がよいと思うか」の問いに対する回答結果を示す。「読み書き」「数字・計算」「時計」に関する結果を表したものがそれぞれ図５、図６、図７である。

「読み書き」についての保育者の回答結果は、「ひらがなの読み書きができることはどちらでもよいが、自分の名前だけは書ける方がよい」が36.7%、「ひらがなは、ある程度書けて全部読める方がよい」が35.7%、「ひらがなは、書けなくてもよいが全部読める方がよい」が25.0%となった。この結果から、保育者間で読み書きの力に対しての考え方に差があることが示された。これについては、前稿でも示したように同じく教員間でも差が見られた。回答率50%以上を得た項目がないことから、各市、園、学校で方針が統一されておらず、各個人の主観に任せられていることが推測される。

「数字・計算」「時計」については、少々バラつきはあるものの回答率50%以上を得た項目がそれ

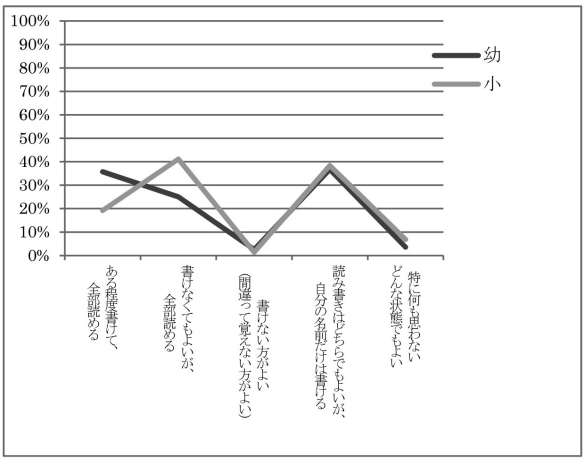

図５　入学前にどのような姿がよいか「読み書き」

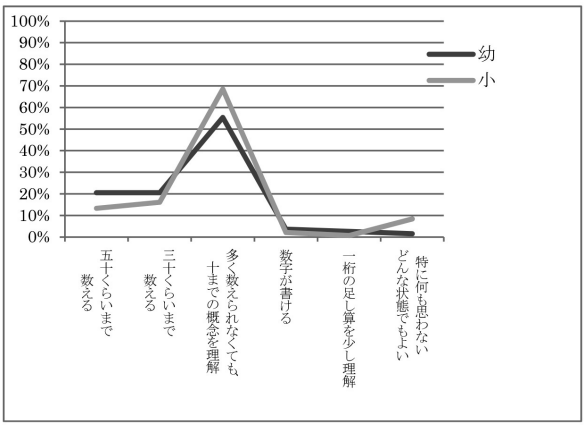

図６　入学前にどのような姿がよいか「数字・計算」

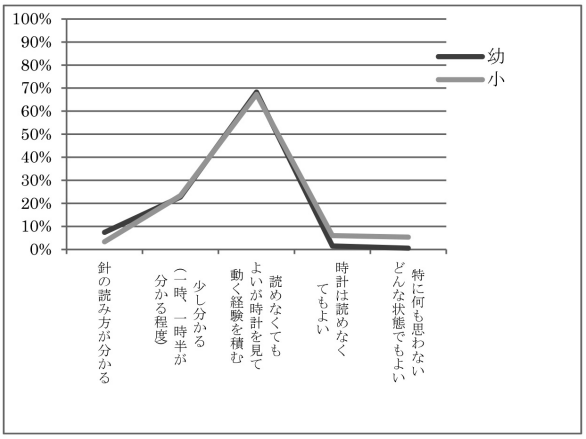

図７　入学前にどのような姿がよいか「時計」

ぞれあった。それは、「数字・計算」では「多く数えられなくてもよいが、10までの数の概念が理解できる（保育者：55.4％、教員：68.5％）」、「時計」では「時計の針を読めなくてもよいが時計を見て動く経験を積む（保育者：68.3％、教員：67.3％）」であった。これらの結果からは、保育における一つの方向性が示されたと考えられる。

さらに保育者と教員を比較してみると、「読み書き」について差が見られた。「ひらがなは、ある程度書けて全部読める方がよい」において、保育者は35.7％であったのに対し教員は19.2％、「ひらがなは、書けなくてもよいが全部読める方がよい」において、保育者は25.0％であったのに対し教員は41.1％であった。保育者の方が高い段階で考えている。「数字・計算」「時計」については大差はなかったが、それぞれ最も高い段階を選んだ割合は、保育者の方が上回っていた。

また、自由記述の回答において複数の教員より、「数字と物を対応させて捉える力」や「感覚的に５つまでが一目で分かる力」が、小学校の算数につながる大切な力であると記されていた。

３．小学校の様子を見ることについて

前稿に示したように、「保育の様子を見たことがあるか」の問いに対する教員の回答結果からは、Ａ市とＢ市で有意差が認められ、Ａ市（Ｎ＝71）は80.3％、Ｂ市（Ｎ＝90）は57.8％であった。しかし、保育者の「小学校の様子を見たことがあるか」の問いに対する回答からは、Ａ市とＢ市で有意差は認められず、Ａ市（Ｎ＝80）は62.5％、Ｂ市（Ｎ＝128）は54.3％の保育者が実際に見たことがあると回答した。どちらの市も、教員より保育者の方の割合が低い。Ａ市においては、保育者と教員の間に有意差が認められた。（$x^2 = 5.7602, p < .05$）

４．連携のあり方について

表２は、Ａ市とＢ市の合算データより、保育者と教員の連携に対する率直な思いを示したものである。（　）内は割合を示している。「連携をもっとしていくべきである」という積極的な意見項目において、保育者の回答は半数以上の58.6％であったのに対し、教員は39.1％であった。逆に「連携など必要ない」「現状で十分」「正直なところ重荷である」という消極的な意見３項目における回答を合わせた割合では、保育者は26.9％、教員は44.0％であった。

次に、連携の内容13項目に対しての必要性を得点化したものを「連携意識度得点」として（４件法による回答結果を１から４の数値で重みづけをして、13項目の平均点を出した）、現場が求める連携内容を調べた。

連携の内容13項目は以下のとおりである。

①小学生と幼児の交流活動
②特別な支援を要する子も含めて、次年度入学の幼児や現１年生の児童についての情報交換
③小学校教員と保育者の協議会
④小学校教員と保育者の交流会（気軽に話す場）
⑤小学校長や園長など、管轄する者同士の交流
⑥小学校教員と保育者の合同研修
⑦小学校教員が保育を参観する
⑧小学校教員が夏休みなどを利用して、保育を体験する
⑨保育者が小学校教育を参観する
⑩保育者が小学校教育を体験する
⑪保護者も含めた交流
⑫幼・保と小の接続カリキュラムづくり
⑬職員間の交換異動（１年以上）

表２　連携に対する率直な思い（Ａ市とＢ市の合算データ）

	幼 N=208	小 N=161
そもそも連携など必要ない	0(0)	1(0.6)
現在、密に連携をとっており、現状維持すれば十分である	26(12.5)	34(21.1)
本当はもっと連携をとるべきであるが、その他の業務が忙しくて、連携に関する仕事は正直なところ重荷に感じている	30(14.4)	36(22.3)
本当はもっと連携をとるべきである。現況では時間に余裕があるわけではないが、それでも連携は大切だからもっとしていくべきである	122(58.6)	63(39.1)
本当はもっと連携をとるべきである。ただ今のやり方ではなく他の方法で連携を図るべきだ	11(5.2)	15(9.3)
その他	0(0)	3(1.8)
無回答	19(9.1)	9(5.5)

図８は、保育者による連携意識度得点のＡ市とＢ市の比較を示したものである。双方の得点が正規分布であると仮定して得点の平均点の差についてWelch法によるｔ検定をおこなった（有意水準５％、両側検定）ところ、次の６項目において有意差が認められた。それらは全てA市の方がB市よりも上回っていた。

「情報交換：t(206)＝2.87,p＝.002」
「研修：t(206)＝2.47,p＝.007」
「保育参観：t(206)＝3.09,p＝.001」
「保育体験：t(206)＝4.38,p＝9.37*10^(-6)」
「小学校参観：t(206)＝2.44,p＝.008」
「小学校体験：t(206)＝1.86,p＝.03」

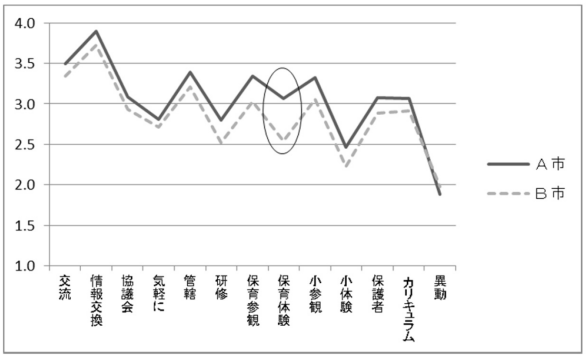

図８　連携の内容13項目における必要性（保育者のＡ市とＢ市の比較）

「小学校教員が夏休みなどを利用して、保育を体験する」の項目において、Ａ市とＢ市に有意差が認められた点が興味深い。前稿では、教員からも同様の結果が示された。Ｂ市よりも連携が進んでいると思われるＡ市の方が、「教員が保育を体験すること」の必要性を保育者側も教員側も意識している。つまり、その意識が連携が比較的進んでいることに関連している、または逆に連携を進める中でそのような意識が高まると考えられる。

図９は、同じく保育者による連携意識度得点のＡ市とＢ市の合算データから「どのような連携を必要としているか」ということについてのランキングを表したものである。また教員との比較も表している。双方の上位３項目は一致し、１位「情報交換」、２位「交流活動」、３位「管轄者の交流」であった。双方の「連携意識度得点」が正規分布であると仮定して得点の平均点の差について、有意水準５％で両側検定のt検定をおこなったところ、「小学校教員が夏休みなどを利用して、保育を体験する：t(364)＝3.19,p＝.0008」においてのみ有意差が認められ、教員よりも保育者の意識が高いことが示された。

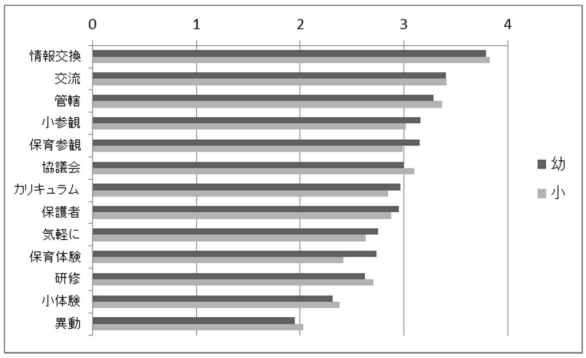

図９　どのような連携を必要としているか

Ⅳ．考察

１．保育者の意識改革について

教員が「就学前に身につけておく必要」があると強く感じる事柄については、保育者もそれ以上の意識を持ち合わせていた。今回、教員との共通見解が確認された内容について、保育者は自身が子ども達のために日々力を注いでいることに対して、自信をもってよいといえる。ただ、保育者は過度のプレッシャーを感じているという現状も伺えた。保育者が思っている程、教員側の要求は高くない。保育者は“幼児期に身につくように”と必要以上に気負うことはなく、小学校をゴールとしないで小学校でも引き続き育っていく事柄として捉えればよい。そうすれば、「座っていられる」という形よりも「最後まで注意深く話を聞く」力を重視し、保育者の話し方や示し方の工夫に課題を見出していけるだろう。

保育所保育指針や幼稚園教育要領の中では明確かつ具体的な“達成基準”が示されていない。それだけに、各々の主観的な判断によって指導がされやすい。今回の国語や算数に関する調査からもそのような傾向が伺えた。特に保育者は小学校に入学後のことを意識しすぎて、子ども達が“困ら

ない”ための保育を展開していることが少なくない。さらに家庭からの要求も加わり、教員が考えるところよりも上の段階の力を子どもに要求している傾向にある。このことこそ、幼小連携を通して見解の見直しが必要な事柄であると考える。それによって、保育者間、または教員間での共通理解をさらに深めていくことも期待できる。

２．教員の意識改革について

教員の高学年担任からは「高学年担任にとって連携は必要ない」という声もあり、小学校教員全体の意識改革の必要性が感じられた。一人の人間の連続した育ちについて、今後理解を深めていくべきである。

連携が比較的進んでいると思われるＡ市でも、連携の現況に対する満足度に関して保育者と教員との間に温度差が感じられた。多数の保育者は、連携が進んでいる実感を得られていない。このような保育者の姿から、教員は、小学校教育の中で活かすことができる事柄を保育者側から充分に受け取ることができていないと考えられる。

前稿で教員の“多忙感”と連携の関連について記したが、保育者の自由記述の回答からも多忙感に関連する次のような記述が見られた。

・連携は主に年長クラス担任の仕事となっている。仕事が増えるため、年長クラス担任を拒む保育者もいる
・園が何でも請け負うことになり、年々仕事が増え、保育者達は苦しくなっている
・とにかく忙しく、追われる中で保育をしている

双方が“多忙感”を抱えていることは、明らかである。ただ、教員の方が、幼小連携の優先順位が低いと考えられる。多忙感を減らす努力とともに、教員が連携の重要性を感じられるための働きかけが必要である。

３．保育・教育の今後の課題について

保育者と教員の共通見解の中から次の３点が示された。

・「返事」「挨拶」など基本的生活習慣を身につけることが就学前に特に必要である
・「話を最後まで注意深く聞く」ことができない姿は、幼児・児童ともに気になる姿である
・基礎体力が乏しい子が少数見られ、幼児・児童ともに気になる姿である

「話を聞く」ということに関しては、「話を聞こうとする姿勢」が大切であるという意見が教員側より挙げられた。そこからは、全ての活動の土台となる“意欲”の基礎づくりを就学前に求める意識が感じられた。この３点について、双方が子どもの連続した育ちを意識しながら力を合わせて取り組むことが求められる。一緒に子どもを育てていく“協同者”としての意識をもって、それぞれの時期にふさわしい方法で働きかけていくべきであると考えられる。

４．連携のカギ

今回の調査から、なかなか連携が進まない地域において、連携のカギとなる２点が浮かび上がってきた。

ひとつめは、「教員が保育を体験する」ことである。この機会をつくることで教員の意識改革が進み、今後その地域においてどのような連携が必要であるか方向性が見えてくるのではないだろうか。また、今回の結果を受けて、教員養成、保育者養成の段階からお互いの保育・教育への意識を高める指導が必要なのではないかと思われた。

ふたつめは、「家庭との連携」である。双方の自由記述の中で、家庭教育の大切さについて多く記されていた。先に述べたとおり、基本的生活習慣を双方が重視している結果からも、家庭との連携は不可欠であるといえる。幼・保と小学校が一貫して家庭教育を進めていくことを通して、幼小の連携もより深まっていくのではないかと考える。

経験を多く積んだ教員から「卒園した園による育ちの違いを感じたことはない。文字や数字の学習を就学前にしてきたからといってそれがその後の力に特に影響はしない。であるならば、幼児期には夢中になって遊ぶことが大切で、小学校ではその遊びが学習に移行するだけである。」という

意見が複数挙がった。この内容について双方が議論を交わすことから、連携の歩みを進めていくとよいと考える。連携は子どもの滑らかな移行のためだけにとどまらず、今後の保育・教育の課題を示唆してくれるものとしても重要である。したがって今後は、今回の研究結果を現場にフィードバックすることで、連携のさらなる前進を促していきたい。

今回の調査から見えてきた現場の“多忙感”と“保育者にのしかかるプレッシャー”の解消策についても、今後も研究を重ねていきたいと思う。

謝辞

本調査に御協力いただきました、Ａ市Ｂ市の保育者・教員の皆様、及び各教育委員会・市役所関係部署の方々に深く御礼申し上げます。

文献（引用文献）

１）河口麻希,七木田敦："保幼小連携に対する保育者と小学校教諭への意識調査"，広島大学大学院教育学研究科紀要，第３部（第63号），pp.81-90，2014
２）進野智子，小林小夜子："幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学研究Ⅰ"，長崎大学教育学部紀要，56巻，pp.63-70，1999
３）佐藤智恵，七木田敦："幼稚園教諭のBeliefに関する研究" 広島大学大学院教育学研究科紀要，第３部(第56号)，pp.333-339，2007
４）木山徹哉，　山田英俊，中山智哉，小林久美，　長谷川勝久，白瀬浩司，柳昌子："新入児童の状況と保・幼・小連携の課題" 九州女子大学紀要，44巻（３号），pp.31-49，2007-11
５）木山徹哉，中山智哉，小林久美，平山静男，白瀬浩司，長谷川勝久，山田英俊，柳昌子："保育者の年長児に対する現状認識と保・幼・小連携への対応" 九州女子大学紀要，45巻（１号），pp.35-57，2008-7